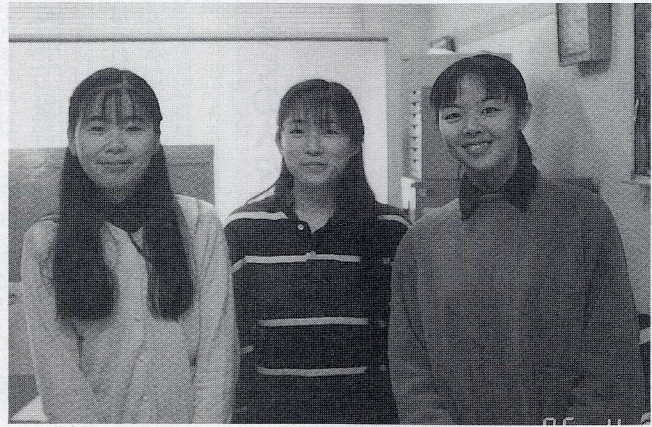


選 返

教育学部研究科博士課程前期  
川越典子



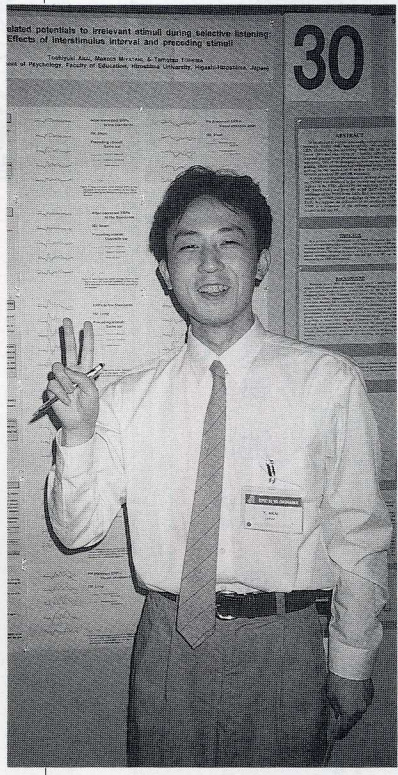
広島大学に入学してから六年の月日が過ぎようとしている。思い返してみると、大学院生活は日々の忙しさの中で後ろを振り返る余裕もなく過ぎてきたように思われる。学生生活を振り返ってみると、頭の中に「邂逅」の二文字が浮かんでくる。教官・友人・研究テーマとの巡り会い。すべてが発見であり、驚きであり、今となっては宝物である。これらの邂逅から教えられたこと、与えられたことはたくさんあった。教官からは研究方法・研究態度、友人からは励ましや勇気、研究テーマにおいては、大学で自分が探求していく道。大学生生活の邂逅は、これからの人生の糧となることであろう。また、自身も相手に新しい発見をさせ得るような存在になれるよう努力していきたい。白秋の歌のごとく、「この道はいつか来た道、ああ、さうだよ、…」と大学生生活を思い返す機会をもてた今、すべての「邂逅」に感謝している。

極私的思い出羅列

教育学部研究科博士課程後期 赤井俊幸

在学中の思い出を書くとなると、どうしても東千田町の頃のことになってしまう。西条では、愛しいバイクが盗まれてしまったとか、研究が遅々として進まなかったとか、賀茂ポールのゲーム料が高すぎるとか、思い出したくないようなつまらない出来事ばかりである。昼なお暗い東千田の教育学部棟は、新入生の私にして「さすがは学問の府」と感嘆せしめるに十分な威厳をもっていたし（単に蛍光灯の数が少ないだけなのだが）、動物舎はまさに「ネズミ小屋」と呼ぶにふさわしい造りであった。ちなみに心理学の事務室を「真ん中の部屋」、学生控え室を「まるなな」と呼んでも、今の学生には全く通用しない。

第二食堂の焼き肉定食は煮つめすぎて（焼き肉と称してよいのだろうか）辛かったし、松浦商店のお好み焼はネギだらけで非常にくせがあったが、なぜか病みつきになる味だった。四百字程度では語り尽くせない思い出が東千田町にはあるのだが、唐突にこれで終わりにする。



晴のち雨 雨のち晴

学校教育学部 間田泰弘



卒業・修了、おめでとう。しかし、卒業、修了は、厳しい社会への出発点であると考えれば、喜んでばかりもいられない。社会に出るときさまざまな問題がふりかかってくる。時にはそれを解決して、周囲の人々に対して優位に立つこともあるかもしれない。しかし、卒業したばかりの若者の力は非力で、当初は、とまどったり、叱られたり、周囲に迷惑をかけた、耐え難い屈辱感を味わったりすることが多いであろう。努力しなければ心は成長しないが、どんなに努力しても報われないという状態が続くことを覚悟しておくのがいい。あたたかも、長雨に耐え、暴風雨に耐えるように。

「創る」「学ぶ」「育つ」

学校教育学部 毛利知子



中学の美術教師になりたい一心で学校教育学部に入學し、はや四年が過ぎようとしている。私の四年間は非常に充実していた。まず第一に、思う存分創作活動ができた。美術研究室でツナギを着た私は、ときには二〇〇以上の透明ホースで奇妙な立体作品を創り、ときには石膏を画面にぶちまけ畳二畳分の絵を描いた。やってみたいことが十分にできる時間と空間があるというのは、とても幸せなことだと思ふ。第二に、美術教育について学ぶことができた。

沖繩を出て

学校教育学部特殊教育特別専攻科 渡久山理

あなたは「広大」この字をなんと読みますか。「ひろだい」と答えた人が多いでしょうが、普通には「こうだい」と読む機会のほうが多いはず。私もたまたま一年でみごとに「ひろだい」と読むくせがついてしまいました。それは、体のすみまで広大に染まりつつある証拠なのでしょう。それはよいことなのか……？



本人（左）

私には沖繩を出て、本土のいろいろな文化に触れることができて楽しかった。雪もみることができたし、雪だるまもつくることができた。お好み焼きもつくり方を教えてもらったし、本当に充実した一年間であった。そして暮れも正月もなくワープロに向かい、勉強に励んだものだった。ここで吸収したことをこれからの活動に生かし、活躍できることを願います。何年後かに特専のメンバーで同窓会をした時は、きっと私たちは大物になっているでしょう。これも諸先生方の厚いご指導のおかげです。心から感謝いたします。

「がんばる」の二年間と「これからは」

学校教育研究科修士課程 妹尾庸子

「おねえさん、来た」「おいおい、私は明日演習なんだよ」と思いつつ、「元氣ないじゃん？ どしたん」「泊めて」……！何がおこるか分からない世の中、仕事は余裕をもって早めに、の鉄則を思いだし、幾度涙したことか。修士の二年間、私はこんな突然の来客に翻弄され続けた。この来客、彼ら彼女らは、学部時代縁あって遊んでもらっていたある施設の卒業生の子たちである。卒業し、経済的に自立した。けれど、一方寂しくて……。彼ら彼女らとともに歩いた、施設行事「四〇キロウォーク」。その時の「がんばろ、がんばろ」のかけ声を、時々思い出す。「きれいごと」なのかも、と苦悶しながらの道のり。いろいろな意味で先行き不透明な今の自分を、その「きれいごと」が支えている。

